

『万葉集』に現れる建築と環境の関係に関する研究

THE RELATION OF ARCHITECTURE AND ENVIRONMENT IN THE JAPANESE POEMS "MANYOSHU"

張 奕文*, 中川 景子**, 若山 滋***

*Yiwen ZHANG, Keiko NAKAGAWA
and Shigeru WAKAYAMA*

The present paper investigates the relation between the stylistic nature of architecture and environment in the Japanese poems "MANYOSHU" written during Japan's Manyo Dynasty 478-759. After analyzing the type of wording and the context of poem, we propose that the feeling of architectural space in Japan's Manyo Dynasty is closely connected through physical elements and symbol of environments. On one hand, in more privacy sense, the poems describes the beauty of "KACHOUFUGETSU" by using "inn" "hermit's cell" for architecture and "autumn" "wind" "night" for environment. On the other hand, in more non-privacy sense, "house" "door" "shrine" for architecture and "sky" "sun" for environment are used when the poems praise an emperor.

Keywords: *architecture, environment, literature, aesthetic consciousness*

建築, 環境, 文学, 美意識

1. 研究の意義と目的

文学の中に現れる風景には自然空間と共に都市及び建築空間が存在する。そこに現れる建築と環境は、その空間に対する作者の情緒、あるいは意識が言語化されたものであり、個人的な心象空間と呼ぶべきものであるが、それがその時代の文化様式から生まれ、後世の人も含めた多数の人に伝えられることを前提とする限り、ある種の普遍的な感性、意識、思想のベースを想定して言語化され、かつその文化の内部において普遍的な意味を既に獲得しているものと思われる。

特に詩歌は、文学の中でも人間の感情の高まりを直接伝えようとするもので、そこに出現する空間は、その環境との関係において作者の心を強く揺さぶると共に、その時代の人の心をも、さらに後世の人の心をも強く揺り動かすものであった。

本研究では、日本の最古の文学の一つである『万葉

集』の歌を取り上げ、そこに現れる建築用語を含む歌を全て抽出し、そこに現れる環境（音、熱、光など環境工学的な意味の環境）に関する用語について分類し、その使われ方を類型化した上で、その歌に表現された情感との関係を考察する。また、その結果を既に発表されている「『万葉集』における建築空間」^{※4)}及び「文学の中の都市と建築」^{※6)}と合わせ、建築と環境との関連を歌の文脈を踏まえて考察し、万葉時代の日本文化における空間情緒性を探ることを目的とする。

2. 研究対象

『記・紀』^{※1)}と共に日本最古の文学の一つである『万葉集』は全20巻4500首の歌集であり、仁徳天皇の時代（478年）とされるものから天平宝字3年（759年）まで約3世紀にわたる時代の歌を、天皇、宮人、専門歌人から下層の者の作に至るまで幅広く集めている。

* 名古屋工業大学社会開発工学科 大学院生・工修

** 名古屋工業大学社会開発工学科 大学院生

*** 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, M. Eng.

Graduate Student, Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology

Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

本研究における用語の抽出は、新潮日本古典集成・『万葉集』全5巻^{x1)}、日本古典文学大系4・『万葉集』全4巻^{x2)}、土屋文明『万葉集私注』全10巻^{x3)}によって照合し、本論の引用は使用文字が最も現代語に近い新潮日本古典集成を基本とした。

3. 既往の研究

日本の古典文学に現れる都市と建築空間に関する研究としては、木村徳国氏の『記・紀・万葉』の中の建築用語の研究^{註2)}があり、「家」「やど」「殿」「宮」など建築物全体を表す用語に限って、その意味及び具体的内容を考察し、成果をあげている。特にその中のイ非建造物説^{註3)}は、注目すべき卓見であった。『源氏物語』に関しては池浩三氏が寝殿造建築の史実との対応関係を研究している^{註4)}。古代から中世にかけての居住空間の文化的側面に関しては小野恭平氏の研究^{註5)}があり、この時代の日本の居住美学の成立を検討している。また国文学の分野では中小路駿逸氏の研究^{註6)}が注目すべきものである。

古典文学の中の都市と建築空間の変遷に関して筆者らは、「『万葉集』における建築空間」^{x4)}、「『古今和歌集』『新古今和歌集』における建築空間」^{x5)}、「『源氏物語』における建築空間」^{x7)}と「『枕草子』における建築空間」^{x8)}などの論文の中で、登場する建築用語を全て抽出することを基本に、その用語が示す空間の性質、文脈との関係、作者の空間評価、文学的空間構造などについて研究を続けている。以上の研究をまとめたものとして、「文学の中の都市と建築」^{x6)}が出版されている。

古典和歌については、古来から多くの研究があるが、それらは文学史的な研究が主であり、本論のように、建築学の分野において、文学的な資料の中の建築空間とその環境との関係を系統的に論じた研究はまだ見られない。

4. 研究方法

4-1.『万葉集』の中から、人間の五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）を基準とする感覚に関連する環境要素を指す語を環境用語と定義して抽出する。ここでの環境用語とは、建築と関連する用語に限り、歌の意味内容によって〔光〕〔音〕〔熱〕〔空気〕〔自然〕〔季節〕に分類して集計する^{註7)}。

以下に、その分類と用語例を示す。

- a : 光 視覚で明暗を判別できるもの、日、月、気象現象、火炎（日、天、火、夜、月等）
- b : 音 聴覚で認識できるもの、人と動物の声、自然界の音（音、うぐひす、言、

ほととぎす等）

- c : 熱 体に熱感を与えるもの（火、氷凝り等）
- d : 空気 空気を媒体として環境認識をもたらすもの（風、霞、霧、天、あらし等）
- e : 自然 視覚、聴覚、触覚で認識する自然界の現象（雨、雪、あらし、露、霧等）
- f : 季節 視覚、聴覚、触覚に時間的要素を加えたものである。旧暦に従って、一～三月を春、四～六月を夏、七～九月を秋、十～十二月を冬とする

味覚、嗅覚に関しては対象となる歌中でそれに関する用語がほとんど見受けられなかったため、本研究の対象外とした。また歌中に「にほひ」という語が登場するが、これは「気配」の意味で用いられているのであり、嗅覚の用語とはならない。

4-2.抽出した環境用語について建築用語との関連を考察し、それぞれの修飾用語を抽出して修飾用語との関連から建築及びその環境に対する人間の感情を考察する。また、建築空間及びその環境に対する歌の情感表現を、文脈、歌の作者、その時代背景を踏まえて考察する。

5. 環境用語の抽出

『万葉集』において環境用語を抽出した頻度の高い用語を表1と図1に示す。建築用語の含まれる歌624首を

表1 頻度の高い環境用語

分類	環境用語	頻度	分類	環境用語	頻度	分類	環境用語	頻度
光 (430)	天	87	音 (162)	音	26	自然 (139)	雪	36
	朝	67		ほととぎす	24		雨	29
	夜	64		声	19		露	24
	夕	47		言	18		霜	15
	日	35		鳥	18		霧	10
	月	28		うぐひす	13		しぐれ	7
	雲	26		雁	7		霞	7
	雲居	11		鶴	7		白露	3
	火	9		こほろぎ	6		あらし	2
	昼	7		鶏	4		白雪	2
	霞	7		鈴	4		雷	2
	暁	6		鹿	3		つむじ	1
	曇り	4		かはづ	2		天	87
	宵	3		雷	2		風	30
	闇	3		秋	55		霧	10
	星	3		春	51		霞	7
	空	3		冬	6		かぎるひ	4
	影	3		夏	4		空	3
	御蔭	2		熱	9		あらし	2
雷	2	氷凝り	1	つむじ	1			
						季節 (144)		

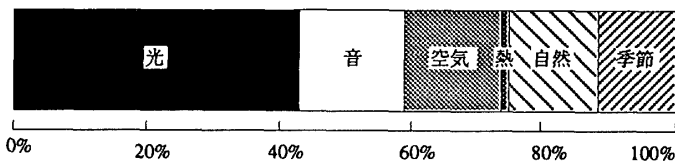


図1 環境用語の分類別構成比

対象とし、環境用語はその中の344首に登場し、合計1002語である。

5-1. [光] について

[光] に関する用語は430語で環境用語全体の42.9%を占め、頻度が一番高い。用語の頻度に偏りがあり、頻度の高い「天」「朝」「夜」「夕」「日」「月」などの7語で[光]の80%を占める。

[光] に関する用語は太陽の光、月の光、気象現象と炎に関するものに大別される。また、その中には「夕」「宵」「暁」という太陽の光と月の光の両方に関連を持つものもある。最も多く見受けられる用語は、太陽の光に関する「天」「日」「雲」などである。これは農耕生活を主として行った当時の人々にとって、日の光は日常生活を大きく左右する重要な存在であったため、光に対する関心が強かったものと思われる。次に多い用語は「夜」「月」「星」など月の光に関するものである。万葉人は日光と月光に対する両方の情感を持つことがうかがえる。気象現象に関するものは「霞」「雷」などが挙げられる。炎に関するものは「火」「篝」などである。

5-2. [音] について

[音] に関する用語は162語で環境用語全体の16.2%であり、[光] に次いで多い。

[音] に関する用語は、人間の言葉から動物及び自然現象まで様々な声音がある。特に鳥の鳴き声が多く、万葉時代の人々の「花鳥風月」に対する関心の深さがうかがえる。

5-3. [空気] について

[空気] に関する用語は144語で全体の14.4%であり、その中のほとんどは「天」「風」「霧」である。「天」が87語で最も多いことは『万葉集』の特徴である。次いで「風」の30語、「霧」の10語と続く。ここにも「花鳥風月」の美学の一端がうかがえる。

5-4. [熱] について

[熱] に関する用語は11語で全体の1.0%しかない。ほとんどは「火」である。とりわけ、明かりや暖房として室内で用いられている「火」の頻度が高い。これは庶民生活を詠むことの多い『万葉集』の特徴であろう。

5-5. [自然] について

[自然] に関する用語は139語で全体の13.9%を占めている。「雪」や「雨」など降雨に関するものが多かった。当然のことながら「あらし」や「つむじ」などたまに起こる現象よりも「雨」「雪」など普段からよくある現象の方が歌に詠まれている。これも太陽の光「天」「日」などと同様、生活を左右する天候状況に対する強

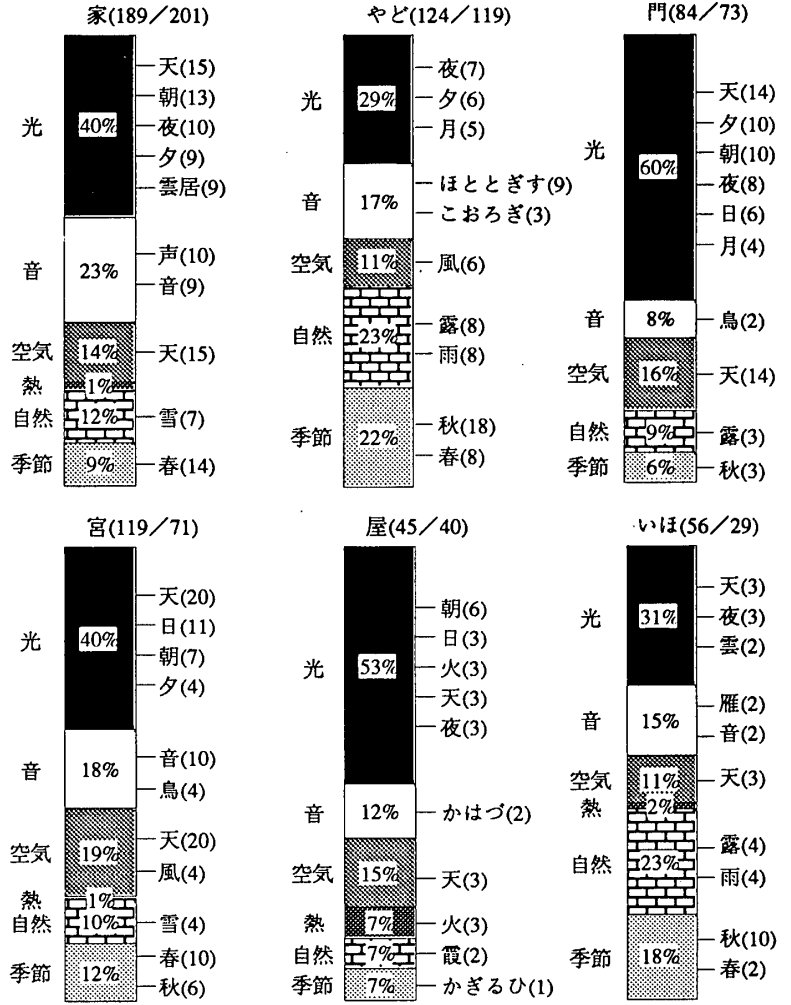


図2 建築用語と環境用語の関連

い関心を表していることと思われる。

5-6. [季節] について

[季節] に関する用語は116語で全体の11.6%を占めている。対象となった歌の18.9%に[季節]に関する用語が含まれている。また、[季節]の用語が直接含まれていないが、歌の舞台となった季節が判明できるものは180首で対象となった歌の28.8%となっている。万葉時代には歌に季節を読み込むという習慣が定着しておらず、全体として季節の判別できる歌が他の時代の和歌集と比べて少ないためである。しかし、その中でも「秋」「春」は特に多く、[季節]全体の90%以上を占める。「春」「秋」という語が直接用いられていることもあるが、その象徴(季語)として春ならば「梅」「うぐいす」、秋ならば「黄葉」などが多く用いられていた。当時の人々の季節の判断は、視覚、聴覚の反応によるところが大きかったものと思われる。

6. 建築用語と環境用語の関連

建築用語と環境用語の関連を示す図2^註

8)を見ると、[光]はどの建築用語にもある程度の頻度で現れるが、「家」「門」「宮」「屋」に関して特に比率が高く、中でも「天」「日」などの太陽の光に関する用語が多い。人と家族を意味する「家」、皇族を意味する「宮」、住居と皇居を指す「門」は、太陽を表す「光」と共に使われることによって、開放的で遠望的な空間を表現している。

「やど」「いほ」においては、夜の[光]や[自然][季節][音]に関する用語が増してくる。旅の「やど」と仮住まいの「いほ」は、夜光の中で自然や音や季節と共に使われることによって、自然の造化を賛美する情緒が織り込まれている身近な空間を表現している。

具体例として、

梅の花 散らす春雨 いたく降る 旅にや君が 廻りせるらむ (巻10・1918)

我がやどの 萩咲きにけり 秋風の 吹かむを待たば いと遠みかも (巻19・4219)

・・・君にあれやも 秋萩の 散らへる野 辺の初尾花 仮廬に算きて 雲離れ 遠き国辺の露霜の 寒き山辺に 宿りせるらむ (巻15・3691)

などが挙げられる。

「家」「門」「宮」などの光の当てられた空間と、「やど」「いほ」など草花や季節などの自然の美を鑑賞する空間との間に、「陽」と「陰」あるいは「ハレ」と「ケ」の対称的な関係が浮かび上がる。

真袖もち 床うち掃ひ 君待つと 居りし間に 月かたぶきぬ (巻11・2667)

といった歌にも見られるように、「床」に関しては「月」に関する用語が多い。「床」は、歌中では主に「寝床」の意味で用いられ、夜に恋人と会う空間を指すところから「月」との関連が深かったものと思われる。

7. 修飾用語から見る建築とその環境の空間美意識

『万葉集』における建築用語と環境用語がそれぞれの修飾用語との関連及びその情感表現を図3に示す。本研究ではそれらの用語の組み合わせにより引き起こされる一般的な表現を考察するものであって、表に示されている事柄がその解釈のすべてではない。

修飾用語から建築用語と環境用語の関連を見ると、ある特定の情感表現と深く関わっていることがうかがえる。環境用語において「天」には「高知るや」、「日」には「高照らす」などの修飾用語がつく。例として、

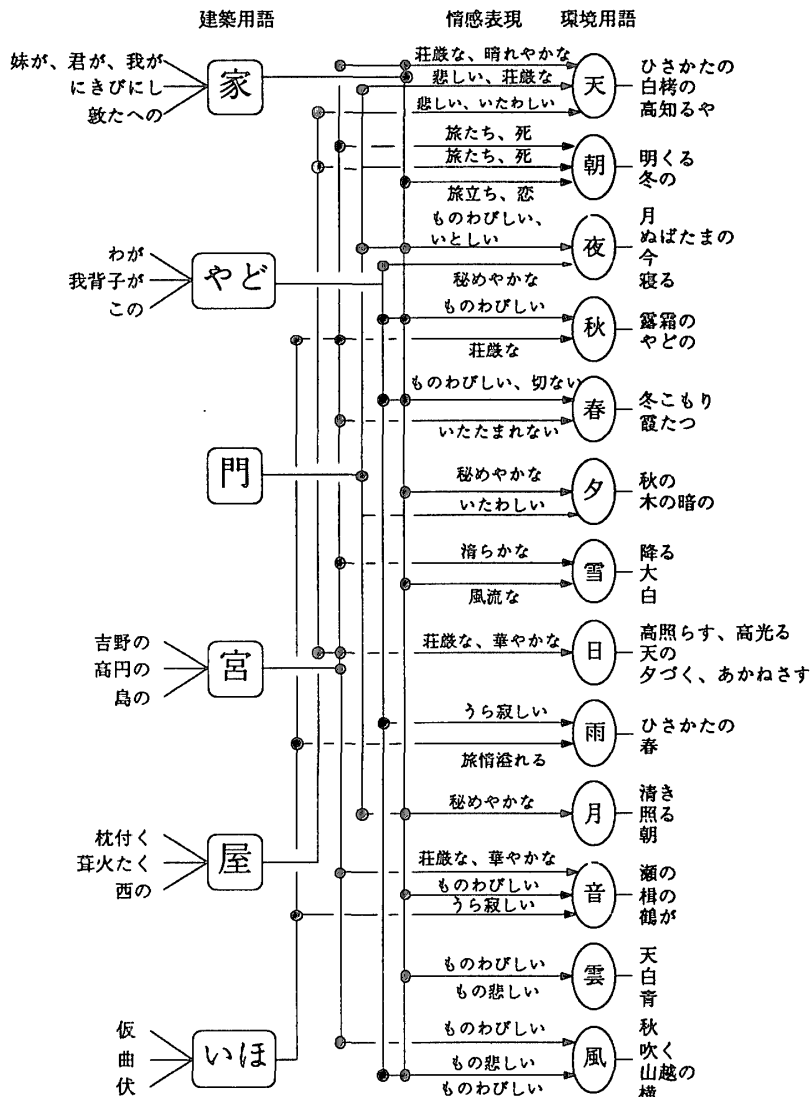


図3 修飾用語との関連と情感

明日香の 清御原の宮に 天の下 知らしめしし やすみしし 我が大君 高照らす 日の御子 いかさまに 思ほしめせか・・・ (巻2・162)

などがある。

このような修飾用語がつく背後に、その時代の人々の生活にとって「天」「日」がいかに重要な存在であったことは如実に現れている。

・・・天露らふ しぐれをいたみ さ丹つらふ 黄葉散りつつ 八千年に 生れ付かしつつ 天の下 知らしめさむと 百代にも 変わるましじき 大宮どころ (巻6・1053)

・・・年の緒長く 仕え来し 君の御門を 天のごと 仰ぎて見つつ 畏けど 思ひ頼みて いつしかも 日足らしまして 望月の滴しけむと 我が思ふ 皇子の命は・・・ (巻13・3324)

に見られるように多く用いられている「天」「日」などは尊いものとして崇められたものである。「雨」「雪」などは、そのままの意味として歌中でも用いられている場合もあるが、主に「雨」や「雪」が与える自然の美し

さやものあはれさを歌っているものが多い。例として
雨は降る 仮廬は作る いつの間に 吾兄の潮干に 玉は拾はむ
(巻7・1154)

などがある。

「天」「日」が家系を意味する「家」「門」や天皇の「宮」と共に用いられると、「晴れやかな、厳かな」といった直接の情感表現になってくる。それに対して、「月」「夕」「夜」は「清き」「秋の」などの修飾用語と共に「秘めやかな」人間感情として、旅の「やど」や親族を意味する「家」「門」と共に多く用いられている。例として、

月夜には 門に出て立ち 夕占問ひ 足占をぞせし 行かまくを欲り
(巻4・736)

があげられる。草庵の小屋である「いほ」では、「春」の「雨」や「吹く」「風」や「露霜の」「秋」など大自然の中で、わびさび美の美学として「ものわびしい」といった情感を表現している。又、

山越しの 風を時じみ 寝る夜おちず 家にある妹を (巻1・6)
に見られるように、「風」は、旅先から「家」「やど」の想う場合に用いられ、距離感を強調したり、もの悲しい情感を引き出す役目をしている。

8. 文脈の情感表現から見る建築とその環境の空間美意識

建築用語を含む歌をその歌の作者、作られた状況と文脈内容により分類する。分類方法として、1)政治の場や宴など公の場で読まれたものと民衆の間で読まれたものに分け、2)作者(主に身分による)、3)文脈内容により分類を行った。そこに含まれる建築用語と環境用語との関連を図4に示す。

8-1. 公的な表現の歌

文脈内容とその関係について見ると、公的な表現の歌は皇族の住居を意味する「門」「宮」「家」が多く用いられており、それに伴う環境用語には「天」「日」等が多い。これは物理的要素としての「天」や「日」として用いているのではなく、その持つ象徴性を利用し、政治的な表現として天皇の偉大さを讃えているのである。

具体例として、

やすみしし 我が大君 高照らす 日の御子 荒栲の 藤井が原に 大御門 始めたまひて・・・ (巻1・52)

・・・人さには 満ちてはあれども 高光る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下 奏したまひし 家の子と 選ひたまひて・・・ (巻20・4444)

などが挙げられる。

8-2. 私的な表現の歌

私的な表現の歌の中で、「やど」「いほ」は「秋」「風」「ほととぎす」と不可分で自然と密接に結びついており、仮住まいの空間として花鳥風月の美学と万葉人

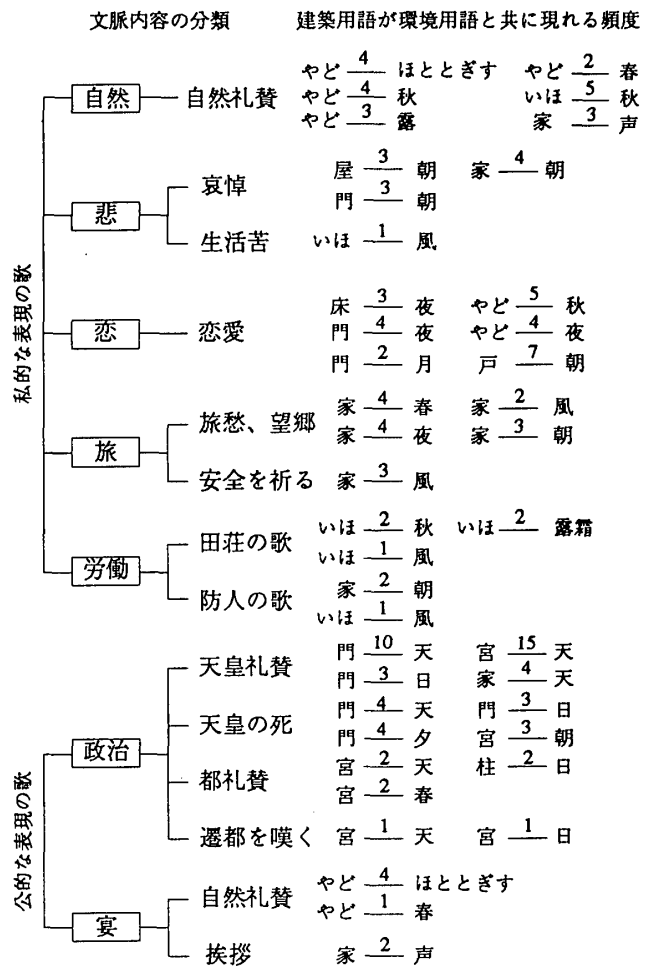


図4 建築と環境用語における文脈内容

の自然人であったことを示している。一般的な住居を意味する「家」「門」は、不在の空間として「月」「夜」と共に恋や旅愁や人の死など人間の内なる情感に直接訴えかける内容のものが多い。例として

秋の野の み草刈り葺き 宿れりし 宇治の宮処の 仮廬し思ほゆ
(巻1・7)

我がやどの 秋の萩咲く 夕影に 今も見てしか 妹が姿を
(巻8・1622)

があげられる。

全体的に見ると、「宮」と「やど」「いほ」は公的と私的の対比として現れ、「家」「門」はその文脈によって公私ともに現れている。公的な表現の歌は初期のものに多く、私的なものは後期に多い。

9. 結論

「万葉集」において、当時の人々の空間情緒性は建築空間とその周りの環境とに密接に結びついていることがうかがえる。[光]の太陽と[自然]の降雨に関する用語「天」「日」「雲」「雨」「雪」が建築用語と共に多く用いられていることは、当時の人々にとって日の光や

天候状況が重要な存在であったことを意味している。歌の中で「天」「日」は尊いものとして崇められたのに対し、「雨」「雪」は美しいものとして歌っていることが多い。

環境用語の持つ物理的要素、或いはその象徴性は建築用語と結びついてある特定の情感表現を表している。

「天」「日」など太陽の光は「家」「門」「宮」と共によく登場し、開放的で遠望的な空間情緒を表現していることに対して、「やど」「いほ」においては、自然の造化を賛美する情緒が織り込まれている身近の空間を表現している。「家」「門」「宮」の空間と「やど」「いほ」の空間は「ハレ」と「ケ」の関係が存在している。

歌の文脈における情感表現では、公的な場面で詠まれた歌は天皇の住居を示す「門」「宮」「家」が太陽を示す「天」「日」と共に多く用いられており、これらは天皇の偉大性を讃えているのである。それらはおおらかで単純素朴な表現のものが多く、万葉人の特有の「ますらおぶり」といったようなものが現れている。それに対し、私的な場面で詠まれた歌には、「やど」「いほ」が「秋」「風」「ほととぎす」と共に登場し、仮住まいの空間として花鳥風月の美的な表現を示している。また、「月」「夜」が一般的な住居を示す「家」「門」に用いられると不在の空間として、家族の愛情、離別の悲哀、忍ぶ恋といった人間感情を託した歌となっている。これらには『古今和歌集』『新古今和歌集』などの勅撰和歌集に見られるような「たをやめぶり」の兆しが見える。

「家」「門」「宮」は万葉集初期の作品に多く見られるようなおおらかな空間表現で、「やど」「いほ」「床」などは繊細優美な空間表現であるといえる。『万葉集』において、初期の人間の内なる感情をそのままおおらかに歌い上げているような表現から、後期に近づくにつれ人間の持つ感傷味といったような感情を繊細優美に歌い上げる表現に移行している。それに対応して初期の「天」「日」などの直接的に環境を反映する表現から、後期の「秋」「風」など憂いや風情の表現に代わってるといえる。

・注・

- 1) 「古事記」と「日本書紀」を指す。
- 2) 木村徳国氏による「記・紀・万葉世界における建築の研究」に属するもので、日本建築学会論文報告集において、「七・八世紀におけるタカドノ・タカヤの建築的イメージ」(No.242、1976.4)「七・八世紀におけるイホ・カリホ・イホリ」(No.248、1976.10)が発表されている。
- 3) 木村徳国氏はイヘ非建造物説について、参考文献9)のpp.152において、「上代語イヘは、住居のための建築的なものではあったが、建造物を限定的に指示はしていなかった。むしろ、建造物をふくめて、家族があつまり住まうところの建築的なすまい全体を指示して

いた。それは、場所のひろがり、を重くふくむものであって、建築的なイメージとしては、カキ(垣)を敷地にめぐらし、カド(門)を備え、その内部にいくつかの建造物を建てならべた、居住のための、いわば建築施設的なものをイメージすべきであろう、とするのである。」と述べている。

- 4) 池浩三氏による『源氏物語——その住まいの世界』(中央公論美術出版)に詳しい。
- 5) 小野恭平氏の研究は、日本建築学会論文報告集において、「中古の文学作品からみた山里の基本的イメージとその美について」(No.393、1988.11)「中古の文学作品からみた山里の興味について」(No.404、1989.10)「中世初期の仏教説話にみる仏道修行者の庵」(No.436、1992.6)が発表されている。
- 6) 中小路駿逸氏は『日本文学の構図——和歌と海と宮殿と』(桜楓社)において、古代文学の中で建築イメージが希薄なことを指摘している。
- 7) 環境用語のうち、複数の要素に関わるものに関しては、歌の内容によってそれぞれの要素に抽出した。複数の要素をもつ用語は下記の通りである。「天」「かぎるひ」「空」は[光・空気]、「霧」「つむじ」は[自然・空気]、「霞」は[光・空気・自然]、「雷」は[光・自然・音]、「あらし」は[自然・空気・音]、「火」は[光・熱]それぞれに分類されている。従って、同一の用語でも、分類により頻度の異なるものがある。
- 8) 図-2と図-3に示す建築用語「家」「やど」「門」「宮」「屋」「いほ」は、『万葉集』における建築用語の頻度が高いものである。参考文献4)を参照する。

・参考文献・

- 1) 青木生子ほか4名 校注：新潮日本古典集成・『万葉集』、全5巻、新潮社、1984.9.10
- 2) 高木市之助ほか3名 校注：日本古典文学大系4・『万葉集』、全4巻、岩波書店、1957.5.6
- 3) 土屋文明：『万葉集私注』、全10巻、筑摩書店、1976.3
- 4) 若山滋ほか1名：『万葉集』における建築空間、日本建築学会計画系論報告集、No.388、pp.116-123、1988.6
- 5) 若山滋ほか1名：『古今和歌集』と『新古今和歌集』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.405、pp.141-147、1989.11
- 6) 若山滋：文学の中の都市と建築、丸善ライブラリー、1991.4.20
- 7) 若山滋：『源氏物語』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.408、pp.93-99、1990.2
- 8) 若山滋：『枕草子』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.411、pp.89-95、1990.5
- 9) 木村徳国：上代語にもとづく日本建築史の研究、中央公論美術出版、1988.2.25
- 10) 木俣 修：『万葉集』—時代と作品、NHKブックス、1966.12.10
- 11) 伊藤正雄、足立巻一：要説日本文学史、社会思想社、1977.8.30
- 12) 桜井 満：『万葉集』(上)、旺文社、1988.4.20
- 13) 会田雄次：日本の風土と文化、角川書店、1972.2.10

(1994年11月10日原稿受理、1995年3月6日採用決定)